
楽園の虹

カトラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園の虹

【Nコード】

N4798F

【作者名】

カトラス

【あらすじ】

『兄ちゃん達、いい仕事があるんだけどな、楽園で仕事してみないかい？』甘い言葉と金につられて楽園に行った若者達は、そこで見たこともない美しい景色に遭遇する。しかし、その代償はあまりにも大きかった。

楽園の虹（カトラス・オリジナル）（前書き）

2008 覆面企画本開催 空 参加作品です。

楽園の虹（カトラス・オリジナル）

あの日、あの時、あの場所で見た世界一美しい空のことは一生忘れない。

いや、忘れたくても忘れられないと言ったほうが正しいのだろうか。

なぜなら、今までに見たことも無いぐらい美しくて、脳裏にやきつく景色は、私と友人達の人生を大きく狂わしてしまったからに違いなかったからだ。

それは、悪魔が私達の魂と引き換えに見せてくれた最初で最後の絶景だったのかも知れない……

1954年当時の私は海をこよなく愛する青年だった。

その頃の私は、朝から晩まで、暇を見つけては地元のサンタモニカの海岸で友人達と一緒に時間を忘れてサーフィンに没頭する毎日であった。

そんな楽しい日々を過ごしていた夏の終わりに、ある白人の男に私と友人達は浜辺で出くわしたのだった。

『兄ちゃんたち、楽な仕事してみないか？』

そう言つて、男は私たちに声をかけてきた。

『楽な仕事ってなんだよ？ ヤクの運び屋だったらお断りだぜ！』

私達の中で一番血気盛んなマーカスがおっさんに詰め寄って聞いた。

『そんな危ない話こんなところでするもんかい。ちょっとした軽作業するだけでヤクの密売くらい高給を貰えるっておいしい話なんだけどな……』

半パンツに無知のシャツというラフな出で立ちをした男は、人懐っこい笑顔でそう言った。

『まあ。話だけでも聞いても損はないと思うよ、兄ちゃんたち。立ち話もなんだから、そのレストハウスにでも行つて、うまいもん食いながらも、おじさんの話でも詳しく聞いてみないかい。もちろん飯代はおじさんが派手に奢るよ』

男は、口元を緩めて二カつと笑みを浮かべると、任せておけと言わんばかりに胸を二、三度叩いて私達を誘ってきた。私は男の目が笑っていないのに違和感を感じたが、マーカスともう一人の友人のトムはすっかり男に心を奪われてしまっていた。

『おっさん、奢ってくれるのだったら、話だけでも聞くぜ』

お調子者のトムが飯に釣られて勝手に決めていた。

『じゃ、兄ちゃんたち。うまいもんでも食いに行くか』

マーカスとトムは、男の隣に立って、一緒にレストハウス目指して歩き出した。

私は男に胡散臭さを感じていたので行くのを躊躇していたのだが、なかなか一緒に来ない私を見かねてマーカスが叫んだ。

『ロバート早く来いよ！ お前の分まで食っちまうぞ』

気がつくと、私は砂浜に足をとられながらも小走りで仲間たちの元に駆け寄っていた。

レストハウスに入ると、男は私達に約束した通りに飲食物を派手に注文した。

『兄ちゃんたち、まずはビールで乾杯としようじゃないか』

金髪で水着姿のウエイトレスが、ジョッキに並々とつがれた黄色い液体をウッドテーブルに置いていった。

各々に、程よく泡立ったジョッキを片手に持つと男の合図で乾杯した。

『運命的な今日の出会いを祝して……』

軽くレストハウス内にジョッキの硝子があたる音が響いた。

乾杯をした後に、肉の焼ける美味そうな匂いが鼻を刺激すると、テーブルにステーキが並べられた。

『遠慮なく食べてくれ』

私達は腹も減っていたので、遠慮などするはずもなく、がつつきながら肉を胃袋につめこんだ。

男は、ニコニコと私達の食べっぷりを見ながら、ビールのお代わりを次々と注文していった。

不思議な事に、男は私達をレストハウスに誘っておきながら、なかなか本題の仕事の話を切り出さなかった。ただ、ビールを私達が飲み干すと、どんどん追加で注文して『さあ、飲んで、飲んで』と勧めるばかりだった。私達は、そんなわけで、気がつくときつかりほろ酔い気分になってしまっていた。

そんな、私達の状態を待っていたかのように、男は割りのいい仕事の話をしだした。

『君達は愛国心つてものがあるかい？』

突然、男は唐突に真面目な顔をして話し始めた。

『はあ？ なにを言い出すんだよ、おっさん！』

一番酔いが回っているだろうマークスが男に絡んだ。

男は、マークスのことなど無視するかのように話を進める。

『実は、おじさんのこれから話す、おいしい仕事つてのは、国のためになることなんだ。しかも、海外にも行けて給料もいいときてる』
『おっさん、海外に行けるって本当か？』

トムは目を輝かせて男に聞いた。

『ああ、もちろん本当だよ。南の楽園で仕事をしてもらうのだけどももちろん休みの日はサーフィンし放題だよ』

男は、私達の興味のあることのツボを心得ていた。

『で……その楽園での仕事って具体的に何するんだよ』

私は、はつきり要点を言わない男にいらいらして聞いた。

『仕事っていうほどのものでもないんだがな、楽園に行つて、穴を掘るんだよ、具体的に言つと壕を掘る仕事をしてもらうだけだ。ど

うだ？ 簡単な仕事だろ。穴掘りなんかは、うまくやりや、半日も
かからない仕事だぜ。それで月収500ドル貰えるんだぞ。いい話
だとおじさん思っただけだな』

『おっさん、本当に穴掘りだけで、そんなに貰えるのか？』

マーカスが信じられないといった顔で男に確認した。

『もちろん本当だよ。あとは、この書類にサインしてくれたら、労働契約成立って運びになる。ああ、そうそう、もし今すぐにサインしてくれたら、特別に100ドルを支度金として即金で君達に渡すことが出来るのだけだな……100ドルあったら、新しいサーフボード買ってもお釣りがくるんじゃないの』

男は、いつのまにかウツドテーブルの上に契約書なる書類を広げて、サインするように誘ってきた。

私達、三人は、書類を詳しく読みもしないままにサインをしていた。

『君達が聞きわけがよくて利口なのでおじさん助かったよ！ じゃ、これ約束の金だよ』

男は、私達がサインした書類の横に新札のドル紙幣を置くと、一緒に名刺を置いた。

『申し遅れたが、おじさんはここで働いているんだ』

名刺には、国防総省と書かれていて、名刺の中央に刻まれた鷲が誇らしげに私達を見つめていた。

サンタモニカの海岸で国防省の男と出会ってから、三ヶ月後には、私達はマーシャル諸島の洋上を航行する空母の甲板にいた。空母の目的地はマーシャル諸島にあるビキニ環礁地帯にあった。なんでも、新型爆弾の投下実験をするとの事で、キャッスル作戦という大袈裟な名前までつけられているものだった。でも、そのような作戦名までつけられているにも関わらず、私達には作戦の具体的な説明は一切なされてはいなかった。

所属の上官に聞いても『お前達は英雄になるために、ここに来たんだ！ただ粛々と歴史の目撃者になるだけだ』と抽象的な事しか言ってくれなかった。

でも、その時の私達は、新型爆弾の投下実験なんて全く興味の無い事柄であつた。興味があるのは空母の甲板の下に広がるエメラルドグリーンの海だけであつてして、その海でサーフィンをして遊ぶことしか頭になかつた。

最初、軍隊に入隊させられた時は、国防省の男に騙されたと酷く後悔したものだったが、男の言つたことは、まんざら嘘でもなく、仕事らしい仕事はほとんどなくて、普通に働くよりは何倍もの給金が私達には支払われていた。しかも、空母から見えるマーシャル諸島近辺は、サンタモニカと比べ物にならないぐらいに美しく、時々、空母の周りをイルカの群れがドルフィンダイブをして私達を歓迎してくれたのだった。

そんな、何をするともなく、ただ海だけを眺めていたある日のこと。

私達は上官に呼ばれて、仕事らしいことを言われた。

『明日、諸君達はビキニ島に揚陸船に乗って行ってもらい、そこで来るべき投下テストに備え壕を掘って待機してもらう。投下実験は三日後にとり行われるため、仕事が早く完了すれば、実験までの間は休暇にあてればいいだろう』

私達は上官の指令を聞いて飛び上がりそうに嬉しかった。それは、穴さえ掘れば、待ちに待った休暇が貰えてサーフィンを存分に楽しめるからだつた。

次の日に、私達を含めた二百人ばかりの兵士達は揚陸船に乗つて、ビキニ島におりたつた。

ビキニ島につくと、指定された場所に壕を掘る作業をした。作業はラッキーな事に半日もしないままに終了して、夕方からは、念願

のサーフィンに時間を当てることが出来た。正に楽園での休暇を満喫することが出来たのであった。サーフィンが終わると、浜辺で軍から支給された物資で盛大なバーベキューをして仲間達と楽しんだ。そんな、最高の時は投下実験の日まで続いた。

投下実験まで10分前になった時、私とマークスとトムは投下予定ポイントから50キロは離れた壕の中で待機していた。

私達の前後には100メートル間隔で同じような境遇の仲間達が緊張しながらテストを待っている。投下三分前になると、上空を爆音を立てながら、B-29と呼ばれている爆撃機が飛んでいくのが見えた。ほどなくすると、遙か後方の飛行場からけたたましいサイレンの音が鳴り響き、実験開始の合図がなされたのだった。

私達は、支給された望遠鏡でB-29の姿を追った。B-29のぼてつとした格納庫が開くのが望遠鏡で確認すると、誰かが『サングラスをつけると叫んでいた』

私達が慌てて、サングラスをかけた瞬間に、遙か前方から、激しい閃光が走った。閃光の後、海がぽっかりと穴が開いたように見え、すぐに巨大な水柱が上空を飛んでるB-29にかかってしまうかと思うぐらい舞い上がった。まるで、この世の終わりかと思うぐらいの地響きが耳をつんざき、数秒後には熱風が私達の頬を伝わっていた。熱風はまるで、頬を焼き尽くすかのように熱い。

私はあまりの熱さのために、壕の中に頭を隠した。どれくらい、壕の顔をつ突っ込んでいたか分からないが、次に顔を上げた時には、爆弾が投下されたところの海上には、超巨大なマッシュルームの形をした雲がニョキニョキとのぼりたっていた。海面にも同じように雲が映っていて、どちらが上下なのか錯覚を覚えるほどのものだった。遙か50キロは離れているのにも、爆風によって舞い上がった水柱が熱風によって水蒸気となり、雨となって私達に降り注いだ。き

私は閃光が収まったのでサングラスを外した。

サングラスを外した先には、見たこともない幻想的な景色がビキ二環礁を包みこんでいたのだった。

それは、投下ポイントから、私達の壕まで、空一面に広がる無数の虹であった。一つや二つの虹なんかじゃない。数百、いや数千の虹が大小様々に点在しており、その虹を見た全ての者の心を奪った。まさに、楽園にふさわしい見るものの魂を奪い去る光景だったのだ。

虹の余韻が残る中、投下実験終了を告げるサイレンが鳴ったのは、それから数分後のことである。

その美しい虹を見た、次の日にマーカスの体に異変が現れた。いや、マーカスだけではない、トムや私や壕の中でテストを体感したもののほとんど全員が程度の大小はあれど、体に不調をきたしたのだった。それは、あの景色を見た見物料を取るかのように、私達に代償を求めるものだった。

特にマーカスの状態は悪くて、顔は紅潮して、綺麗にパーマーのかかった髪の毛が全て抜け落ちた。手足もなぜだか分からないが、野球のグローブのようにパンパンに腫れあがってしまい、その日のうちにうわ言を言いながら死んでしまった。

基地にいた軍医はマーカスのように死んでいく仲間をなんとかしようとして、無線で本部に連絡していた。

しばらくすると、宇宙服をきたような兵士達が何人もやってきて、私達の体に変な音のする器機をあてて、振り切った針の数値をノートに記入するばかりであった。

私は、『何があったのか？』と軍医に聞いてみたが、彼はただ首を横にふるだけであった。

それから、数年後には、私は軍を退役していた。

正確に言つと、働けなくなったという方が正しいだろう。

軍からは、生活に困らない程度の金は貰ったが、その代わり、もうサーフィン出来ない体になってしまった。もう私には、腕も足もないからだ。

私は、たまたま四肢を失うだけで虹の代償を支払う事が出来たが、友人のトムは全身ガン細胞に侵されて命を代償に持っていかれ、もうこの世にいない。

友人達を失った私に残されたものは、あの楽園で見た脳裡に焼きついて離れない虹だけなのかもしれない……

楽園の虹（風海南都バージョン）（前書き）

この作品は覆面企画終了後に、風海南都先生（一応）が、カトラスの楽園の虹の題材を気にいって書いてくださった、カトラスの宝物です。

当初、自ブログだけに公開していたのですが、あまりにも完成度が高いので、風海さんの許可なく勝手に掲載させていただきました（本人は嫌だと思うけど、カトラスが貰ったものなので自由なんです）どうぞ、カトラスの稚拙な文章と比べてみてくださいね。比較できるので面白いものになっています。

手コキのプロVS小説家の戦いです。

楽園の虹（風海南都バージョン）

「虹が七色つてのは嘘だぜ？」

マーカスの口癖。

「虹つてのは後にでっかい空色があって初めて虹だ。八番目の色は空色だ」

地平線の向こう側に、青々と広がる空に浮かんだ虹を見て呟く。

1954年、海は何処までも青く、決して交わることもない空と平行に手を繋ぎながら、美しく穏やかな顔をしていた。

私は、サンタモニカのこの空と海、そしてサーフィンをこよなく愛し、毎日仲間と海岸で波と戯れていた。

そろそろ夏の終わりを告げる濃い日差しの中、一人の白人男が白砂を蹴りながら、私達の方へ近づいてくる。

「なあ、金、欲しくないか？」

やや恰幅のいい中年男は、怪しげに笑いながら噛み煙草を吐き出す。

「なんだよあんた。ヤバイ仕事なんかしねえよ」

無遠慮な男に腹を立てたのか、血の気が多いマーカスが睨みをきかせる。

「そんなチャチなヤマじゃねえ。もっと簡単だ。とりあえずそこのレストランの飯を奢るぜ。そこで話そう。もちろん断ってくれたっていいさ」

腹が減っていた私達は、タダで飯が食べられるならと胡散臭いこの男の後につく。

いざとなったら黙って帰ればいいし、他に連れがいるわけでもなさそうだ。

男はラフなシャツにスニードハットを目深に被り、丸腰だと言わんばかりに両手を広げている。

マーカスとトムは思いがけない豪華な食事を素直に喜び、はしゃいでいた。

男は相好を崩していたが、その目は鋭く、瞬時に私達を値踏みしているかに見えた。

吐き出した嘔み煙草がじつとりと黒い染みをかたどっている。

「大丈夫だ、いざとなればこっちは三人だぜ？」

私が少し躊躇気味なのを気付いたのか、マーカスがこっそり耳打ちしてくる。そうだなと私は頷いた。

ベイサイドホテルの食事は豪勢で、ビールや冷えたジンライムを喉に流し込みながら、私達三人はガツガツと食らいつく。

男はその様子を黙って見ているだけで中々本題を切り出さず、ビールを舐めるように煽っていた。

分厚くジューシーな肉は、普段食べているバーガーなんかとは比べ物にならない。

赤く茹で上がったロブスターの大きさに苦戦しながらも、その身を味わった。

胸の谷間が深く切れ込んだ水着のウエイトレスが、汗を掻くほど冷えたジョッキを次々と持ってくる。

ブロンドのウエイトレスは、くつきりとくびれた腰ラインの持ち主で、女好きのトムはちらちらと目で追う。

食事を終える頃、アルコールと日差しのおかげで、すっかりほろ酔いになっていた。空が少し淀んで見えて気分がいい。

そこで、待ちかねたように男が切り出した。

「愛国心ってあるか？」

「は？　なんだよソレ？」

一番強い酒を煽ったマーカスが眉を寄せる。

「俺が頼みたい仕事ってのはな、お国のためになる話なんだ。しかも海外に行けて給料も破格。サーフィンし放題だぜ？」

マーカスが無視して男は話しだす。

「海外に行けんのか？」

トムは身を乗り出して目を輝かせた。トムの家は一番貧しかった。

「本当さ。そこはまるでエデンの楽園だ」

男はビールを飲み干す。

その後の男の条件は、若く、好奇心旺盛な私達にとって魅力溢れるものだった。

「結局その仕事ってのは何するんだよ？」

どこかぼかされているグレーの部分に食らいつたのは私だ。なぜか誤魔化されている気がしてならないのと、都合の良過ぎる話に不信感を抱いたからだ。

「穴を掘るんだ」

「穴？」

「そうだ。楽園に行つて穴を掘る。簡単だ。上手くやれば半日で終わる。月収は五百ドル、おいしいだろ？」

「穴って……プッシーじゃねえの？」

トムの冗談に笑いが起きたが、私は笑えなかった。この男の話は上手すぎる。

「穴掘りだけでそんな大金、信じらんねえよ」

マーカスが嘘付けと言わんばかりに薄ら笑いを浮かべた。

「本当だ。この紙切れにサインしたら契約成立だ」

「上手すぎないかその話し。おかしいだろ」

私が詰め寄ると、男はニツと笑った。一瞬暗く光った瞳にゾツとしたが、財布を取り出す男の手に目を奪われた。

いきなり百ドル札を三枚並べ、その横に契約書と思しき書類を添える。

「今ここで契約書にサインしたら、支度金として一枚ずつやるよ」

百ドルもあれば、新品のサーフボードを買っても釣りが来る。見合ったまま、一瞬沈黙が流れた。

「国の仕事って言ったろ？ 急ぐ仕事だから破格なんだよ。これはチャンスなんだぜ？」

男は両手の平を見せて笑った。

「おお！ 星散りばめたる旗は、今猶棚引くや自由なる大地、勇者の故郷に！」

いきなり国歌の一節を叫びながら、トムがサインをする。

「俺はやるぜ！ どうせ家にいたって貧乏暮らしだ。口減らしになつておつかあも喜ぶさ」

「そうか、そりゃ親孝行だな」

男はトムに百ドルを渡す。

「その楽園つてどこじゃあ、虹が見えるか？」

マーカスが酩酊気味になりながら男に尋ねた。父親がノルマンディで悲惨な死に方をしているせい、彼は「国」という言葉に酷く敏感になる所がある。

今だつてそうだ。何をおかしな事を口に行っているのか。

「ああ、見えるさ。たぶんとっておきのがな」

男の答えを聞くや否や、ニヤリと笑いながらマーカスもサインをする。もちろん私も仕方なくだが結局はサインをした。

「これは俺の名刺。俺はここのもんだ」

私達のサインを確認すると、男は名刺を差し出した。

それを見た私は驚き、ろくに契約書を読まずにサインした事を後悔した。

名刺の中から誇らしげな驚が威嚇してくる。それは国防総省の証だった。

三カ月後、私達は翡翠色に反射する海の上にいた。

マーシャル諸島洋上を航行する空母の甲板の上は日差しが強い。相変わらず空は青々として私達を見下ろしていた。

目指すはビキニ環礁地帯。任務の名称は「キャッスル作戦」というもので、新型爆弾投下実験のようだ。ようだというのは、詳細が一切明らかになっていないからだ。

所属の上官に至っては「お前達は英雄になるためにここに来た。ただ粛々と歴史の目撃者になるのみ」とオウムのように繰り返すだけで埒があかない。

爆弾投下実験などと言われても全く現実味が無く、頭上の空と眼下のエメラルドに輝く海と戯れる事しか頭に無い。

初めに軍隊に入れられた時は、契約書にサインした事を激しく後悔したが、その後は仕事らしい仕事も無いのに破格の給料が支給され、男の言った事は本当だと納得した。

そして何よりマーシャル諸島の空と海は、サンタモニカと比較にならない程美しい。水面の輝きを突き破り、イルカの群れが真っ青な空に向かって弧を描く。その度に水しぶきの端に小さな虹が弾けて消える。

まさに楽園の中に、私達はいたのだ。

ある日、上官に呼び出された。

明日、ビキニ島へ行き三日後の投下実験に向けて壕を掘れと言う。穴掘りが終われば休暇にあてて良いと聞き、私達三人は喜んだ。

「さつさと掘って波に乗ろうぜ！」

トムの言葉に異論を唱える者はいない。サーフィン三昧だ。

翌日、他の二百名程の兵士と一緒にビキニ島で壕を掘る。作業は予想以上に簡単で、半日もせずに終了した。

私達はサーフボードを抱え、海にダイブすると青い空が迎えてくれた。

楽園の休日はすると体に入り込み、また甘美に受け入れてくれる。

柔らかな女の裸体のように私達を虜にする。風が上手く波を運び、キラキラとした夢幻の世界が広がっていた。

投下実験の日まで私達は楽園に抱かれてはしゃいでいた。

ついにあと十分で投下実験が始まる。

私達三人は予定ポイントから五十キロ地点の壕で待機していた。前後百メートル間隔にある壕の中で、他の兵士達も固唾を呑んでその瞬間を待っている。

さすがに異様な緊張に包まれ、体中から冷たい汗が噴出した。

——投下三分前。

突然、上空に爆音が響く。

B - 29 爆撃機のお出ました。

後方の飛行場から背筋が凍るほどのサイレンが唸りを上げ、空を劈いた。

投下の合図を暗い壕の中で聞くとなぜか恐ろしくなり、急に青空が恋しくなる。そんな思いを振り払いながら、望遠鏡で爆撃機を確認すると「サングラスを装着しろ！」と切迫した怒号が響き渡った。

慌てて装着した途端、遙か前方に激しい閃光が走る。

サングラスのせいで視界は黒い。その黒を容易くぶち破って、不気味な穴が海に現れた。

まるで全てを飲み込んだ地獄の入り口のように。

次の瞬間、巨大な水柱が黒い空に向かって走り、爆撃機を飲み込むかに迫る。

今までに聞いた事も無い程大地が震え、叫び声をあげた。

それは恐怖を超えて畏れにも似た感情を揺り起こす。楽園の終焉かと錯覚する。激しい熱風に体を貫かれ、眩暈がした。

熱い……呼吸もままならない私は壕の中へと顔を隠した。喉が妬

けるように痛い。時間の経過が無限の恐怖を連れて来る。

思わず顔を上げた瞬間、信じ難い光景が飛び込んだ。

海上から現れた超巨大なキノコ型の雲が咆哮し、空へと昇って行く。

決して交わる事の無い筈の空と海が一つになろうと変貌し、世界を変えた。

たとえ神であっても許されることのない、自然の理を破壊して行く。

世界が終わる……本能的に身震いした。

暗黒の視界の中、目の前の世界は樂園が崩壊し絶命寸前の雄叫びを上げている。

ふとイルカの大群の中にいる自分が見えた。イルカ達は血と汚物にまみれたまま体をくねらせ、白い体を引き裂かれながら息絶えていく。

白昼夢か？　ここは一体何処だ？　生命の悲鳴が上がる中、水柱と熱風によって生み出された雨が降り注いだ。

五十キロも離れた壕の上にも絶え間なく落ちてくる。

呆然とし、震える指でサングラスを外した。

すると暗黒の世界が一変し、この世のものとは思えない色彩を連れて来た。

それは神の世界にも似た一枚の絵。

空一面を覆い尽くす、幾千もの虹。

空と海が交わったがために生み出された樂園の落し子。

禁断の扉を開けたがための美しくも忌まわしい烙印。

誰もが心を奪われ、美しさのあまりに沸き起こる恐怖に足が竦む。

「虹だ！」

マーカスは空へ向かって両手を広げ、雨に濡れたまま狂ったように笑いつけた。

永遠の楽園は虹に包まれ、空っぽの空間に投げ出されて浮かんでいた。

翌日、マーカスの髪の毛は全て抜け落ち手足が膨張した。

高熱に魘されながらニヤニヤと笑っているマーカスの目には、あの幾千の虹が見えていたのだろうか。

生臭い息を吐き、黄色く濁った目を泳がせたままマーカスは息絶えた。最後に見た虹に囚われ、消えてしまった。

その後何人もが同じように泡沫へと消えていく。

まるで禁断の扉を開けた代償のように。

もしかしたら……あの男に声をかけられた時から、マーカスは、

この一連の出来事を薄々感づいていたのではないか……彼の死に様を見てそんな疑念に捉われた。

数年後、私は軍を退役していた。

正確に言つと退役というより処分されたと言つほうが正解か。

一生困らない程の保証金と引き換えに体が半分になった。

その後、宇宙人のような防護服に身を包んだ兵士達が、私達の体を調べ徹底的にデータ収集した。我々は検体だったのだ。

もちろん真相など誰も語らない。すべては闇に葬り去られる。あの楽園の暗黒へ。

私の両腕がもがれ、両足は引きちぎられ、今は半分の体だ。四肢を食べたのはあの空かもしれない。

トムは全身が癌細胞に犯され全てを食い尽くされた。

徐々に侵食される体の痛みに悶絶し、泣きながら死にたくないとかき、最後は黄色い泡を口から吹かせ「母さん、母さん」と叫びながら、小さな老人のように変わり果てた姿で逝った。

全ては虹の彼方へと消えてしまったのだ。

あの樂園にあった空と海は、残された私に一つだけ教えてくれた。

この世界は空っぽなのだ。

そして親愛なる二人の友は、同じく私に一つだけ与えてくれた。

空虚という永遠の苦しみを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4798f/>

楽園の虹

2010年10月8日15時34分発行